

西宮市立郷土資料館ニュース 第18号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



当館の特別展ポスター（上段左から、第1回「西宮の文化財展」/第2回「教科書その一世紀」/第3回「道・旅・宿場」/第4回「農具と年中行事」/第5回「西宮の絵馬」/第6回「西宮の職人たち」/第7回「郊外生活のすすめ」/第8回「銅銭の考古学」/第9回「八十塚発掘」）

目次 CONTENTS

開館10年を経過した郷土資料館（西川卓志）… 2

鳴尾の一本松とエビス神の伝説について（下）（井阪康二）… 5

寄贈資料一覧… 8

開館10年を経過した郷土資料館

～西宮市立郷土資料館第10回特別展～

西川卓志(当館学芸員)

1. 郷土資料館略史～入館者数の変遷と各種事業～

郷土資料館は開館以来10年が経過し、その特別展は第10回目をむかえた。この記念すべき区切りの年に兵庫県南部地震が来襲した。地震は西宮市南部に壊滅的な打撃を与え、郷土資料館の展示室や収蔵庫もまたその例外ではなかった。その概況は郷土資料館ニュース第17号や平成6年度館報に掲載した通りである。収蔵庫は、震災後寄贈・寄託の申し出のあった民俗資料や歴史資料であふれ、登録を終えたものは整理作業を待っている。

郷土資料館は教育会館旧教育資料室の資料を引き継ぎ、西宮市の歴史を実物資料を通して学ぶことができる場として、1985年にスタートした。開館1年目は開館記念講演会を実施しただけであったが、2年目からは特別展、歴史講座や親と子のための郷土史講座などの各種講座が始まった。開館当初は、郷土史を扱った博物館的な施設が西宮市では初めてであったこと、記念講演会が好評であったこと、さらに開館が夏季休暇直前であったことなどがさいわいして、常設展示室は連日入館者でごったがえした。7月・8月の月間入館者はそれぞれ1万人をこえ、初年度1日あたりの平均入館者数が271人、日によっては500人以上を数えた。この開館当初のお祭り騒ぎは1986年も継続し、落ち着きをみせるのは開館3年目を迎えてからであった。

郷土資料館が市民のなかに定着するにしたがって漸次入館者の減少がはじまった。これは新規類似館に見られる共通の現象で、その原因には常設展示のマンネリ化などがよく論議される。当初60,000人にせまった年間入館者も、平成元年度には40,000人、また平成3年度には35,000人をわり、たんに数の問題にとどまらず郷土資料館の活動全体が見直す必要にせまられるようになった。郷土資料館年間入館者の月別動態は、年度はじめの4月からじょじょに増加しはじめ、各種事業が集中する8月にピークをむかえる。その後、12月にかけて減少し、2・3月あたりで最低となる。この傾向は開館初年度から変わらず、毎年同じ傾向を繰り返しながら、入館者が少なくなってきた。この動態には本館が一角を占めている西宮市教育文化センター(中央図書館・市民ギャラリー併設)全体の入館者数の増減が影響するが、毎年同様の傾向が認められるのは事実である。

このような傾向なども考慮しながら、平成2年度から「土曜展示室」、平成4年度から「企画陳列」がはじまった。本館は、開館当初から児童・生徒向けの展示や事業を標榜し、夏季休暇中には「親と子のための郷土史講座」「中学生のための郷土史講座」を実施、日常的には学校見学の受け入れにも積極的であった。これらの事業には、開館当初から配置された指導主事があたり、学校や教諭との調整に奔走した。これにくわえ、「土曜展示室」は児童・生徒が実物資料により親しむ場を提示し、「企画陳列」は常設展示室の活性化を図るとともに小学校の校外学習に合わせて民具活用を開拓した。これらの事業は漸次その目的通りの成果をあげ、とくに土曜展示室では子どもたちが好奇心いっぱい目目で実物資料と接している。その結果としてか、入館者の減少にも一応のはどめがかかり、月別では1月2月3月の1日当たりの入館者数も増加した。入館者数は現在35,000人をこえて安定し、一応の目安となる入館者数からみると郷土資料館の活動は安定期に入ったとすることができよう。この安定は新規事業の定着が生み出したものでもあり、今後も工夫した活動の継続に努力していく必要がある。

2. 特別展について

本年、第10回をむかえる特別展は、開館したつぎの年から始まった（表紙写真）。実施期間は夏季休暇中で約1箇月、併設の市民ギャラリーがその会場となった。特別展では、教育会館旧教育資料室時代の資料も含め実物資料の展示に重きを置き、テーマを設定してきた。これらの展示の主眼は、所蔵する資料を中心にゆるやかなテーマを設けて、よりひろく開陳することにある。そのため、前9回の展示では、テーマを追求するがあまりその内容が限定的になることは避け、とりわけ民具については、緩やかなテーマで多くの民具が登場できるものとしてきた。

今回の特別展では、郷土資料館が開館して以来収集してきたいろいろな資料を振り返り、郷土資料館がこの10年間何を収集してきたか、について報告することを目的としている。郷土資料館における資料の収集には寄贈と購入という方法があり、これらによって収集してきた資料の総点数は計10178点にのぼる。これらを内容によって区分し、以下のテーマを設けた。

① 作られた資料

作製や収集を続けてきた二次資料(複製品・模型)の紹介。

[資料] 鳥羽市日和山方角石 西宮市岡太神社旧尼崎藩領界碑 西宮市極楽寺弥陀石仏 山崎通分間見取延絵図 行程記 百姓逃散一件訴状 西宮市西蓮寺文書 銅鐸

- ② 江戸時代の旅 江戸時代中国街道・西国街道の要衝として栄えた西宮宿を中心に江戸時代の旅を紹介する資料を展示する。
 [資料] 旅行用心集 浪花講道中記 東海道名所図会 和泉名所図会などの名所図会 大日本細見道中図鑑 懐中磁石 各種道中記 北摂社寺巡覧図等
- ③ 錦絵いろいろ 樽廻船にかかわりのある錦絵を中心に江戸時代から明治時代にかけての錦絵を紹介する。
 [資料] 菱垣廻船川口出帆之図 新酒番船入津繁栄図 上総九十九里地引網大漁猟正写之図 士族の商法等
- ④ 教育資料コレクション 本館が所蔵する約5,000点の教科書の内、近年収集された資料を中心に、明治時代教育版画等も展示し、永年収集してきた資料の一端を紹介する。
 [資料] 江戸時代往来物 塵却記 明治時代初期検定期教科書 単語図 教育版画 錦絵修身談図絵
- ⑤ 西宮の風景 現西宮の町並みができあがる過程で重要な役割をはたしてきたいろいろな公園やそこで行われた事業のポスター・絵ハガキを展示する。
- ⑥ 生活を物語る資料 開館以来収集してきた民俗資料を公開する。

これらは郷土資料館がこの10年間に作り上げてきたささやかなコレクションである。そこで記念講演会では、近隣博物館の充実したコレクションの内容・成り立ち・収集方針を市民の皆さまと一っしょに学ぼうと、以下の講演会を企画しました。

日時 平成7年8月27日(日)午後1時から4時まで

場所 西宮市立郷土資料館 1階会議室

テーマ 興味深いコレクション

内容 「神戸市立博物館所蔵の古地図コレクション」

(神戸市立博物館学芸員 三好唯義氏)

「尼崎市所蔵の博覧会資料コレクション」

(尼崎市教育委員会学芸員 桃谷和則氏)

ご来館をお待ちしております。

鳴尾の一本松とエビス神の伝説について(下)

井阪康二(当館館長)

7. 鳴尾の浜と沖が神仏と関わる話

3章で触れたように、尼崎市の大覚寺の十王堂の由来譚や、大阪平野の大念仏寺の亀鉦の話も鳴尾の沖での話である。鳴尾の沖は神仏の信仰と関わりの深い所ようである。

また、鳴尾の浜も神仏と関わりがあった。たとえば、宝塚市大原字堂坂に宝山寺という寺がある。この堂坂は昭和46年に約20万枚の銅銭が出土した所である。ここでは宝塚市指定無形民俗文化財に指定されているケロント祭が行われている。この祭に次のような伝説がある。それは

昔、本尊の十一面観世音菩薩は、紀州の海岸の寺院にあったが、津浪で流されて、西宮市の鳴尾の浜に漂着した。それを見つけた海女は拾い上げ、灯明をともして自分の家に持ち帰り、しばらくお祭りしていた。ところが、ある日突然、本尊は白い鳥に乗って北に向かって飛んで行ってしまった。最初本尊は清荒神に降りたが、再び舞い上がり、西谷の古宝山という所に着いた。その地で今度は翼のある馬に乗り替え、さらに北に向かい、馬の足跡という所で休憩した。そして本尊は宝山寺の下にあるにごり池で馬の足を洗い、この寺にはいった。この池は今でもにごっているという。とあり(『宝塚の民俗』宝塚市教育委員会 昭和50年3月)、宝山寺の本尊は紀州の海岸から鳴尾の浜に流れ着いたというのである。

そして、この話の中で本尊は白い鳥に乗って清荒神に降りたということである。この清荒神が祀られている清澄寺に次のような縁起(『宝塚市史』第4巻にこの縁起は室町時代とある)がある。その梗概はつぎのようなものである。

寛平6年(894)に本尊を造り終えた。遣わされた勅使がこの本尊を船に乗せて都へ上がる途中、摂津鳴尾沖で船は磐のごとく動かなくなった。そのため本尊をだいて上陸したが、また本尊は動かなくなった。勅使はこのことを天皇に報告した。これは仏の意志であるので、土地を選んで現在の地に本尊を安置したのが、清澄寺の本尊であるというのである。

この話は鳴尾の沖を過ぎると浪速の海に入り、浪速の港に入ることを知っていた話である。いずれにしても、鳴尾の沖と浜は神仏と深い関わりがあることがわかる。

8. 鳴尾のえびす信仰

えびすの神像が鳴尾の沖で鳴尾の漁民の網にかかった話は1章で触れた。えびす神が西へ連れていけというので、戸板に乗せて運んだという家の子孫の方が鳴尾におられるそうである。この鳴尾には元えびすの祠が2か所ある。その1つは中津で現在の砂浜公園にある。もとは中津の村のはずれにあったという。もう1つは鳴尾支所東側にある榎の木の所にえびす神を祀る祠があった。現在、榎の木の所にあった祠はなくなっている(『なるを』)。

また、えびす神は十日戎まで、正月3日を過ぎると鳴尾へ里帰りされる。えびす神は背が低いので門松で目をつけられるといけないので、4日の朝、門松を逆さにするという。このことは私が学文公民館の講座で鳴尾の歴史を話したときに、この話が話題になり、「私の家(受講者)でも昭和10年代に門松を絵に書いた紙を貼るようになるまで、門松は4日に逆さにしていた」との話を知ることができた。この門松を逆さにすることについては、西宮神社の十日夷のときに、9日の晩はえびす神が町を巡行されるので、えびす神が目をつけられたらいけないから9日に門松を逆さにした。これは戦前まで続いていた。しかし、つい最近までこのことをやっているおうちがあった。西宮神社の社家でも最近までやっていった。

そして、鳴尾の小松では『なるを』によると正月9日夕に小松では岡太神社のご神幣を奉じ等覚寺で通夜をする。この日えびす神が猪打(シシウチ)といって、小松の岡太神社にこられる。そして、えびす神の猪打の難を避けるために神社の御幣を持って、等覚寺で通夜をするという。また別説にシシは静止(シジ)の意味といわれ、昔、このあたりが高波により農作物が流された。この土地の災いを嘆かれたえびす神は自ら正月9日に高波静止の神事をされるようになった。そして、この神事を妨げないために等覚寺で通夜するのであるという。また同書は「西宮への御神幸に供奉した人々は、このち太夫と言われ、子孫の中には太夫を名乗っている家もかなりあった。また毎年、旧暦5月14日の西宮神社の御神幸式日には鳴尾の人々が神社に行き神輿の御神幸に参加していたのも事実である。この御神幸に参加するために鳴尾の人々の代表となった総代という家も残っている」とある。

以上見てきたよう鳴尾はえびす神と関わりの深いことが主張されている。

9. まとめ

各章の結論をもってまとめとしたい。

『桜戸雑話』の申年切れの洪水で、今津村の藁屋根が淡路島に流れ着いたこと、中世に

において四国阿波と西宮に船の往来があったこと、西宮神社と人形操りと淡路人形との関わり、鳴尾に淡路の瓦屋が多かったなど、西宮と淡路の間は往来がしやすかったのであろう。

鳴尾の沖は暴風で船はよく難破したらしく、また兵庫から浪速にかけては、灘と呼ばれているように船にとっては難所であったようである。

鳴尾浦は有馬浦とも呼ばれている。それは有馬温泉が潮湯で、熊野の沖の海水を熊野権現の力により鳴尾の沖に流れ、それが有馬で湧き出しているのが有馬温泉であるという。そして、鳴尾の横流れの潮筋を有馬潮といい、これは船乗りも知っていたのである。

一方、平安時代から鎌倉時代にかけて、鳴尾浦は松の名所で、一本松は有名であった。このことは都の貴族達によって和歌に読まれていることからわかる。しかし船から見る鳴尾の松の景色はきれいな眺めであったが、それは謡曲「高砂」に出てくるように、淡路の島影や遠く鳴尾の沖すぎるとある下りは、実は鳴尾の沖で潮流は方向を東南に転じていることを示していると考えられる。

このように、鳴尾の沖は船乗りにも潮の流れが方向を変える所であることが知られていた。鳴尾の浦の大きな松がその目印になったと思われる。そして鳴尾の浦は風光明媚な所であったので、このこととあいまて、都の貴族の歌に読まれるようになり、鳴尾の一本松の伝説が語られるようになったのである。

また、鳴尾の浜に千両箱が流れ着いた話や難破船の物が漂着したなど、物が流れ着く所であった。そして、宝塚市宝山寺はケロント祭りでも有名であるが、ここの本尊十一面観音は紀州の海岸から鳴尾の浜に流れ着いた話がある。尼崎の大覚寺の十王堂の由来譚や、大念仏寺の亀鉦の話、そして、宝塚市の清澄寺の本尊の話も鳴尾の沖に関わっている。鳴尾の沖は神仏と関わる話が多いのである。

鳴尾はえびす神と関わる話が多い。えびす神を戸板に乗せて運んだという伝承を持った家があり、また、西宮神社の夏祭りに関与していたこと、元戎の祠が2つあることなどがある。鳴尾のえびす神の伝説は鳴尾の漁師を中心に、鳴尾は西宮神社と深い関わりがあることを主張する意味で作られた話である。

その背景は、鳴尾の沖が潮の流れの方向を転換する所で、船乗りによく知られた場所である。そして、鳴尾の浦は貴族の和歌によく歌われた、松の名所であった。その上、鳴尾の沖が神仏と関わりのある話が多く、これらのことが背景となり、鳴尾の沖のえびす神出現の話を人々に納得させたのである。そして、「えびす神の伝説」でふれたように『撰陽群談』は西宮の浦に流れ着いた蛭子尊が祀られているのは、沖荒戎社であって西宮神社で

はないことである。このことは西宮神社のえびす神は、あくまでも鳴尾の沖出現を主張していことを物語っている。

註

1 えびす神の信仰については多くの論稿があるが、戦後は『西宮市史』第1巻以外に『西宮神社の歴史』(西宮神社1961)、吉井貞俊著『えびす信仰とその信仰』(国書刊行会1989)、吉井良隆著『神社論攷』(1990)などがある。

2 田中久雄稿「隠れ里と黄金伝説—芦屋市打出の場合—」(『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学 1993)がある。

寄贈資料一覧(平成6年12月～平成7年6月、敬称略)

国定教科用図書123冊(瀧井督三)、初等科修身・ヨミカタ・小学国語読本・尋常小学算術・尋常小学鉛筆畫手本教科用図書12冊(向野泰祐)、着物・帯・伸子張り・桶・弁当箱・蔵の錠前・回転こたつ・煙草盆・唐箕・榊・鯉のぼり・消防団の法被・重箱・西国巡礼の白装束・漆器・俵など(阪下ひで子)、提灯など(南佐智子)、大工道具一式(寺内ちよ子)、草取り器・田植え糸・シロカキなど(松本良三)、ふご・カラサオ・フルイ・唐箕・米サシ・手カギ・麻布・風呂・米櫃・斗榊など(岡田宏一)、フルイ・カラサオ・ナラシ・鍬・トオシ・釜・五合榊・ヨシ簾・シビン・自転車・一升榊・俵編みなど(橋本惣右衛門)、ふご・菅笠・算盤・砵・時計・番傘・箕・ちゃぶ台・カラスキ・ねずみ取り・鍬・鋤・二丁ガケ・万石とおし・やかんなど(厩松昌純)、消防団の法被・膳・椀・湯桶など(小西久嘉)、水車(岡本紀士夫)

ありがとうございました。

なお、1月17日以降の寄贈分については整理途中のため、概要のみ記しました。

西宮市立郷土資料館ニュース第18号 1995年(平成7年)7月1日発行